フィールド（現場）からの風 ㊹

宮田守男

コロナワクチンの確保の困難な報道が続く度に、日本の安全を守る国策の貧弱さを痛感してしまう。全国から桜の開花のうれしい情報と共に、卒業・転勤などの季節だ。新型コロナ対策で自粛を呼び掛けているが、どうなるのだろうか。

早坂隆さんの著書『世界の日本人ジョーク集』で、お国柄を示すジョークが紹介されている。もし同じ国の人々が5人集まったらどうなるかで、米国人は競争を始める。ドイツ人はビールで乾杯する。日本人は漫画の回し読みを始める。米国人は自慢好き、ドイツ人は真面目、日本人は協調性があり横並びの特筆があるとも。模範な行為に横並びなら良いのだが、「皆でやれば怖くない」の風潮での行動の自重を祈るばかりだ。

2005年度の国土交通省・農林水産省の「半定住人口による多自然居住地域支援の可能性に関する調査」で「二地域居住」の用語が注目された。この3月に全国の自治体や関係団体などで「全国二地域居住等促進協議会」が設立された。国全体で人口が減少し、全ての地域で「定住人口」を増やすことができない中、都市住民が農山漁村などの地域にも、同時に生活拠点を持つ「二地域居住」などの多様なライフスタイルの視点を持って、地域への人の誘致・移動を積極的に図って行くとの方針が確認された。大きな社会の変化に、地方創生につなげていけるのかが、地方移住に注目されている中、大きな課題になって行くだろう。

「二地域居住」の実現が可能になる要素を生かすべきだ

既存にある観光資源をどの様に活用して行けるのか。農業でも後継者不足も起因した、耕作放置地の対応も地域の大きな課題だ。新規に定住できたとしても耕作用管理機械などの多額の投資も困難、栽培技術の取得や自然現象への対応も難しい。定住者が地域で農作業しやすい受け皿として、生産法人を主体となって営農集団をつくり、誰もが営農に親しむ環境づくりができないのだろうか。

国土交通省が「4つの人口」と呼んでいる「定住人口」「交流人口」「二地域居住」「情報交流人口」が都市住民の新しい生活様式に広がることは疑いも無いからこそ、本格的な田舎暮らしとなるための地域づくりが、益々求められていくのだろう。自由と言う熟語は、自らに由（よる）と書くと言われている。仕事や趣味などいろいろな物事に興味を持つ事が、毎日の生活の力になるはずだ。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

八方地区内の駐車場利用状況、空き示す○が虚しく見える